

太 棹



しんを画

第百九・十號合本

東京 太 棹 社 發行

胃腸にミカラチ

東京市日本橋區橋町二ノ十
 新潮製藥株式會社
 電話 本局 三八一三番
 掛 東京 七〇一〇八番

松 幸

すき焼

和洋御料理

淺草公園 (千束二ノ三四)

牛鍋本店

電話 根岸 (87) 〇三八〇番
 二〇〇〇番

風流・金ぷら・茶漬

【美地句】

去月屋

新橋二ノ八
 電銀 二〇八



太 棹 第百九・十合本號目次

文樂座東京引越興行(三)……………是澤九似廬……………(二)

文 樂 樂 屋 圖 譜……………宮尾しげを……………(七)

黒 衣 漫 言……………三 五 郎……………(八)

高瀬操氏の「沼津」を聴いて……………内田富太郎……………(三)

ラヂオ才淨曲漫評……………金 王 丸……………(四)

熊谷の地名と人名……………中野三允……………(六)

第卅一回東都五十義會成績表…………………………(一九)

太 棹 社 彙 報…………………………(二〇)

當 座 帖…………………………

編 輯 後 記……………芳河士記……………

表紙・カット……………宮尾しげを……………

文樂座東京引越興行 (三)

是 澤 九 似 廬

この文章は、平家琵琶から抜萃して來たもので、従つて彈法も、筑前風でもなく、薩摩風でもない、どこまでも平家琵琶調を帯びた、哀愁味の漂ふて、至極枯淡であり、靜寂であるべき筈である、(勿論、平家琵琶は音色も譜も變つて居る)そして外の琵琶の如くに派手な彈法ではないのである。

淨瑠璃の文章に「琵琶は女媧氏の作にして、廉妾夫より日の本に傳る、十二の律管に五音を分ち、内心に愁ひあらば音律に現はるゝ四筋の糸の善惡邪正うかつには彈かれまい」とあり、譜も亦、十二の坪を原として作られてある、故人がこの琵琶に就て充分なる智識があるものとして、小櫻の悲歎の責苦が斷腸の思ひをさすアノの場合に、殊更に、派手な手を選んで弾くよりも、平家琵琶調として、極めて錆び切つて唯さへ哀愁の氣の盈ちて居る彈奏を何故に用ひなかつたのか、しかも、其文章には「調べもしどろ恩愛の血筋四筋の糸筋に」とあり「いざや謠はん是とて、浮世は夢かうつゝとや、さは有れど、恩愛の中、心とままつて腸を斷ち、魂を動かさずと云ふことなし」この琵琶唄につれて、小櫻の凄慘な責苦が

あり、行綱は目前に娘の苛責の姿を眺めつゝ、血涙を喰ひはつて「彼の芝蘭の契りのたもとには、かばねを愁歎の炎にこがせども、紅蓮の氷解くることなし」と平家を弾じて居ることゝに綴り込んである平家琵琶とは、更らに似もつかぬ、華やかな手を弾ひてあることが、果してこの親子愛着の絆を絶つと思ひをする場合に適したものであらふか、我等としては疑ひなきを得ぬので、かゝる時こそ精神的に悲哀を感じる平家琵琶を用ひてこそ、始めて作者としての伎倆も見え、勝れた技巧がある譯で、想ふに之はいつの時代にか考へ違ひをした三絃が、外から借りて來て弾ひた手が、存外にも聽客に喜ばれたゝめに端を發して、其まゝで今日に及んで居るものにはあるまいか、今時の琵琶の彈奏は、平家どころか、非常に進化せられた派手な趣きが漲ぎつて居る。淨瑠璃から論じて見て、謠も唄も、淨瑠璃化して居る關係上で、琵琶も、淨瑠璃化してあの儘でよいのであるとの見解も、自然起るだらうが、それなれば、二枚の駒を用ひ、又鉛を駒に付けてまでも殊更に三絃を琵琶音化せんとしたか、淨瑠璃の節付に遺され

である。半太夫、平家、舞、地藏經、鼓歌、順禮唄、國太夫宮蘭、新内、鉢夕、キ、説經などの極く昔の古典風格を大切に保存することから考へて見ても、他の音楽の勝れたところは、研究して淨瑠璃化されて居る譯で、あの現在の琵琶の彈奏は淨瑠璃節の古典としては、改訂正すべきものではあるまいか。

この淨瑠璃を西の芝居へ書卸した初演は、寛延二年十一月とあるゆへ、今年から丁度、百八十九年以前に當る譯で、瞭きりとは云へぬが、琵琶としては、平家か、さもなくては、昔からある樂琵琶しか、なかつたものかとも思ふので、創作上から考へて松波檢校が弾じた琵琶も、勿論、平家としたのが古典からして適當して居るのではあるまいか、今時と違つて琵琶は、唄ふときには合ひの手は弾かなかつたもので、現代流行して居る琵琶の彈法は、筑前、薩摩、などから考案せられて、後世になつて出來たものゆへ、昔の檢校が弾じた琵琶から比較して見ると、その音も、弾き方も、非常に相違があり、殊にその靜寂さは格段に變つて居る。それゆへにこそ昔の琵琶師からは、現今の琵琶のととを「板三味線」と稱して居たほどで、このことは老人なれば誰れでも知つて居る筈である。

このことに關して研究家の太夫、三絃諸彦の高教を仰ぎたいと思ふて居る。我等の想ふ處を卒直に云ふて見れば、布四の琵琶は、素とあつた手が餘りとは靜寂であつたゝめに、中

途で外の手を取つて弾き、時の聽衆氣分に迎合せんとした結果が生んだ藝道の進歩でなくて、破壊の遺物で、平家琵琶の持つ、大きな禪的藝術の自然のあることさへも分らず、又作者の苦心も知らぬ三絃が、ホンノ一時的の技巧によつて遺はれた遺物としか思へぬのである。

古人の影を追ふことにのみ専念することは、古典保存のために結構なことと思ふが、淨瑠璃も時には、自分の持つ藝術の精神的氣持ちに鞭打つて、眞實の藝道に就て反省する必要がありはせまいか、自然の藝に反してまでも、聽衆に迎合せんとすることは、邪道であり、藝の墮落であるまいか。

序に云ふが榮三が遺ふて居る行綱の琵琶の彈奏よりは、平家琵琶の彈法とは違つて居る、アノ型は薩摩琵琶の彈き方で琵琶を直立に建て過ぎて居る。平家は琵琶を今少し臥さして横抱きにして彈すべきである。撥も勿論變つて居る。昔の浮世繪類や、古き繪草紙に遺つて居る檢校の琵琶を抱へた風俗畫などを一見すればすぐ分る、撥も博物館などには、昔のまゝに保存せられてある。

津太夫 (合邦庵室)

今時の玄人の語風は餘りにも、時流に媚び過ぎて、藝が聽衆の人氣に契合せんとする氣持ちに捕はれ、凡てが理智的になつて、段々と古典の雰圍氣から薄らぎゆき、藝の眞實性と

深みが缺けて來て居る。と云ふのは、淨瑠璃節が作者の手で書き卸されて、名人巨匠によつて節付けして初めて語つた當時は、簡明であり、精神的に生き／＼したものであつたと想像せらるゝが、永い歲月を経過する内に、いろ／＼の太夫、三絃彈が、創作者と、節付の精神を捕捉することが出来なくて、徒らに形式的に流れて、遂には枝葉末節な技巧や、模倣の藝に墮落して來たことも決して僅少ではないと思ふ。單り淨瑠璃ばかりでなく他の藝術でも、因襲のみに馴染まず、模倣にも流れず、物外に超然して藝道の根本を窮めて、物の精神を把持すべく、之が則ち藝三昧の境地でこゝに到達する迄には精神の修養と藝道の修行とか肝腎でこの境地を悟り得て無碍變通自在の玄妙に達するので、その凡庸を脱して居ればこそ餘韻があり、餘裕が付き、深淵さが出來、妙諦が生ずる譯で大坪流の馬術の教語に「手綱持つて持たず鞍乗つて乗らず鑑み踏んで踏まず」と云ふが、淨瑠璃道も同じことで、もの寂びた自然の庭に破れ籬、挑ねた釣瓶に、白く錆び切つた月影が懸り、何となく靜寂な風韻があり、落ちついた禪味がある様に、その蘊奥はすべて三昧の悟りで、太夫も三絃も、世俗に超然脱化した氣持が生じて、始めて自分の淨瑠璃として完全に娛しんで語り、愉しんで弾ける譯で、眞の藝術は、現代の實生活とは餘りにもかけ離れのした處があるために、之を營業化しても、時流に沿はぬために無理が出來、矛盾が生じてくるのが當然である。淨瑠璃はわけて現代の大衆向とし

ては普偏性を持たぬ處に、醇乎な古典性が存在し、一般の聽衆には理解されにくい處に、眞の精神藝術としての根本がある譯で、従つて特種の古典味は特殊の鑑賞力を要するのである。日本傳統の藝術は、何藝によらず、この惱みのあることは共通性で、現今の若い太夫、三絃彈、人形遣ひが生活關係からして淨瑠璃道の意志に反してまでも、聽衆に媚びんとするの無理からぬ、一種の時代想である、かゝる推移の渦中にあつて、津太夫のみが、精神の氣魄を持って、颯爽として舊藝道を固守する姿は、恰も懸崖に育生した香氣馥郁たる蘭の姿である。

津太夫の個性は、氏の語る淨瑠璃の如くで何等の陰翳もとどめぬ、雨後の月を觀るやうで、極めて明朗であり、自然である。

合邦閉居は近來にない熱演で、力の這入つた語方で、外の語物に比較して秀逸のものであり、津太夫の藝の若さを感じられた、この合邦はとり立て、此處が著しく良いといふ所もないかはり、又此處が悪いと云ふ箇所もなく、津太夫の個性から出た自然の合邦で、誰にも眞似られぬ、滲み通る藝の眞劍味と、精神さが湧き出て、始めから、終りまで一時四十餘分の間に、寸毫の撓みもなく、間隙もなく、精力絶倫その粘り強よさに呆るゝ程で、之が七十歳に近い老人の藝かと思ふ眼を瞠らすばかりで、殆ど一氣呵成に語り切つた實力には流石に驚嘆せられた。淨瑠璃界の第一人者であり、文樂の國

寶的存在として今後一層自愛を禱る次第である。

頃日仄に聴く處によれば、鶴澤友次郎が文樂座へ復歸して津太夫を弾くとのことであるが、さもあるべき筈で、我等は既に今日あるべきことを期待して俟つこと甚だ遠きの思ひをなした程であつた。この喜びを聴くにつけ、今一つ我等の希望とするところは、淨瑠璃を代表しての竹本津太夫、三味線を代表しての鶴澤友次郎、人形遣ひを代表しての吉田榮三、藝の優劣なき現在の三巨匠が。文樂座の舊時に復して、三人檮下實現の一日も速かならんことを斯道隆盛のため祈つて、この稿を擱筆する次第である。

鍛太夫に望む

鍛太夫の聲が、いつもと違つて、何となく重くろしく藝に不測の悩みがあつた。鍛自身が精神的に脅威を感じて居り、輕妙に語りたい〜と思ふ氣持があり〜と現はれたことは遺憾であつた、そして何とかして不評の人氣を取り戻したいと思ふ念願に燃え立つ必死の努力が却て災ひして、語る淨瑠璃にまで自づと喘ぎの出たことは、過去の手練に似合はぬ失敗であつた。

鍛が、御殿をいかに語るかは鍛自身にとつては鼎の輕重を問はるゝ重大問題であつたが、いつもの様な精神に緊張味がなく御殿としては品位に缺けて、焦慮に喘ぐ結果を見たことは、寔に氣の毒な思ひがせられたと同時に、本人自身も失運

に定めて萬斛の思ひをしたことゝ同情した、今回の鍛はひどく咽喉を傷めて居つた關係か、得意の美音から出る情味が乏しく「ウレイ」がきかず、裏聲が耳につき過ぎて、折角望みの綱が切れかゝつたやうな姿であつた。元來鍛の藝風は、無雜作の裏に浮き上つて來る聲の豊かさで、達者に語りこなす人ゆへに聲が傷んで居ては、グラ〜となり易い御殿などは餘裕がつかず、著しく藝に萎縮が目立つて、寧ろ不思議と感ぜられたほどであつた、かゝることは、専門家には有る例ひで、畢竟、聲のために藝は氣合の弛緩したことに因るべけれど、この状態を克服して聽衆に迫力を與へるやう捲土重來を俟つて、批評することにした。

織太夫の淨瑠璃に就て

織太夫は、つばめ太夫のときに、東京で古靱の代役で尼が崎を語つて非常に好人氣を博してから、一般の聽衆に力量を認識せられたことに端を發して、未來を囑望される一人となつた、師の古靱は、大正八年二月の文樂座の興行で、越路太夫が中途で休み、その代役で尼が崎を語り、大變な好評であつたが、其翌月は安達原三段目を語らしてもらつて、面目をほどこした。師匠、弟子ともにこの尼が崎は、東京と、大阪で因縁付の出世藝なのである。

節物の淨瑠璃を、誰にも分るやうに、はつきりと語り活かすことは至難とされて居るが、いくら上手の太夫でも、餘り

に器用に音を遣ひ過るために、聽いて分らぬことが澤山ある。音遣ひの上手な太夫には、得てして有がちの病弊で、昔の太夫が何を語つて居ても、よく分つたと云ふことは、一つは力量にもよるべけれど、淨瑠璃の音遣ひが今時の太夫に比較して見て、鈍重であり、大まかであり、無器用であつたことにも原因して居る。それに力量第一主義で語ることに熱中し、つとめて音を遣はず、聲で語つて居たことをも、見逃してはならぬ理由の一つである。聲の豊富な織太夫などは、音を遣ふて逃げる必要は入らぬ譯で、正々堂々として力量で淨瑠璃を分るやうに明瞭に語つて、外の太夫に範を示してほしいのである。

昔から美音の人よりも、難聲の人が割合に上手の太夫が多かつたと云ふことは、即ち、これなので、淨瑠璃ばかりは咽物と違つて、分り易く、聴き易いと云ふことが何よりも大切な條件で、師匠古靱の悪い癖までも眞似をせずともよかりさうに思はるる、古靱は大太夫の割に、腹も薄いし、聲も不自由に、女の詞になると、裏聲ばかりで工夫せねば、語れぬ人故に致方がないが、そればかりでなく、音遣ひにしてからが、非常な苦心と、修行の結果で、自分の個性を音遣ひで活かすべく、研究練磨した藝で、織太夫は、師匠に比較しては、腹も強いし、音量もあるし、強ひて師の模倣のみを捕へて語ることは、考へ違ひではあるまいか、今日の織太夫としては、自身の持ち味の藝を發揮することが、淨瑠璃藝術としての本

領であり、價値であることを悟らねばなるまい。しかし淨瑠璃道には、精神から滲み出た藝の眞實と、模倣から來る藝の技巧と、正邪の二途がある。藝の模倣的邪道に落ちてはならぬ。要するに古靱の藝を取らずに、精神の正氣を取るべきではあるまいか。器用から出る技巧は、人氣はあつても、斯道の大器にはならぬことをも辨へねばならぬ。(をはり)

音羽近郊の秋

芳 河 士

鬼子母神出生地

血臭いなどいふな窪地の祠で秋風
木の上に蛇住む穴や秋の風

雜司ヶ谷墓地

雨雲の降らずに流れ鴟のなく

雜司ヶ谷鬼子母神

御會式の萬燈一つ後れて淋し

護國寺

朝寒し雲の切れ目を斜す射る陽

豊島ヶ丘

木立の奥の銀杏黄ばみて高したそがれ

風 坂

羽織ぬいで坂を越したり三日月

文樂樂屋圖譜

—をげし尾宮—



菅相丞を祀る
「天神祀」が
出ると、道實公
を遣ふ人形遣ひ
は樂屋へ、菅相
丞の人形をお祀
りする事にして
ゐます。最近で
は吉田榮三が、
菅相丞を遣つて
ゐますので、そ
の樂屋には、新
らしい荒菰の上
に、神、盛壇、
燈明、供物を前
に、菅相丞の人
形を置いてあり
ます。菅公崇拜
からきたもので
せうが特に祀る
ところに習慣ば
かりでなく人形
遣ひのよき心が
まえが現れてゐ
ます。



くろんぼ 黒衣漫言

——齋藤拳三先生の御一筆に供ふ——

三五郎

前號齋藤氏の文藝評中に人形出遣ひ賛成論を拜見した、これは現在の文藝で若し一日中全部黒衣でやつたら榮三、文五郎役は可成多く代役になつて了ふ懼があるからだといふのである、併し出遣ひを是とすべきか、黒衣を否とすべきか、この問題を只單に代役封じといふ點からそう簡單に云ひ切つていいものかどうか、とりとめもない事ではあるが、私も少しくこの問題に觸れて見たいと思ふ。

昔名人吉田文三郎が巧者な人相見に黙つて觀て貰つたところ、いつも顔を隠してゐることゝ、名前が廣く世間に賣れてゐることを直ぐ見抜いたまではいいとして、若しや評判の大盜日本左衛門ではあるまいかと疑ひをかけられ、飛んでもないこと、自分は人形遣ひの吉田文三郎と申して、舞臺ではいつも黒衣を着て働いてゐるので、と云つて笑つたといふ話があるが、私は昔からのこの人形遣ひの黒衣に何かしら一種の愛著と魅惑とを感じるのである。

昔から人形にまつわる色々な不思議な話が傳へられてゐる。敵同志の役割を演じた人形を樂屋で差向ひにするして置くと一方の人形の顔に疵が出来てゐるといふ話、人形に遣ひの魂がこもつた時はその人形を跨いだものがおこりをふるひ、人形にお詫びをして癒えたといふ話、眞夜中の人形芝居の樂屋で人形のすすり泣く聲が聞えるといふ話——そういふ多分に傳説的な、怪奇的な、人形芝居をめぐるミステリーに深い好奇心をそそられるのであるが、斯ふした世界に住んで毎日人形を相手として日を送り、幕が上れば黒い頭巾、黒い上つ張りに全身をすつぱりつつみかくして、高い下駄をひきづりながら人形を抱き、魚のやうに黙々として三絃の調べの流れるまゝに、踊り笑ひ泣き恨み、そして精魂を打込んだ人形はこの世に残して寂しく命を終る——この人形遣ひの生活程特異な、一種微妙な、燻ぶつた生活が外にどこに求められるであらうか、昔は人形遣ひの部屋の間笑繪が掲げて

あつたといふことを或る人から聞いたことがある、凡てそこには黒い帳で一重隠されてゐるやうな暗さわびしさが付き纏つてゐるやうに感じられるのであるが、この人形遣ひの生活、氣分といつたものを痛ましくも、しつくりと包んでゐるのがあの黒衣だと見てゐるのである。

私はそれからあの黒衣の腰の附紐に、人知れず心を惹かれてゐたことを回想する。今は黒色に統一せられてゐるが、以前はその色で人形遣ひの階級を示したといふが、私の知る限りでは白い紐によつてその人形遣ひの立者であることを表してゐた。白紐の人形遣ひが舞臺へ出ると、云ひ知れぬ安堵感に似たふつくらした氣分に浸つたものである、故人玉藏の如き、特にふさ／＼と長い白い紐を垂らしてゐた、人形割の都合で玉藏のやうな大立者がツメ人形を持つて現はれても、白い紐で一見それと判るのであつた。彼等人形遣ひの立者は、小さい時からの長い間の辛い苦しい修業と經驗とを、僅かにその黒衣の白紐の一點に遠慮勝ちにソツと覗かせてゐたのである。

併し斯う云ふと、人形遣ひの生活に對し、餘りに幻想めいた考へ方をしてゐると笑はれるかも知れない、そこで眼をこすつて現實を直視しやう。そこには若いサラリーマンのやうに華美な洋服を着込んで颯爽として小屋の廊下を濶歩する今の若い人形遣ひの姿を見出すのであるが、進んだ新しい御時勢の空氣を呼吸する彼等の物腰恰好から、ひそかに夢に描

く昔の人形遣ひの濫い、そして煤けた生活の臭ひを嗅ぎ出さうとすることが、元々無理であり野暮であることは知つてゐる。知つてはゐるものゝ、たとへそれが仕打の營業政策に迎合するためとは云へ、一日中何んでも彼でも出遣ひで、「花」を見せようとする、藝をみかくことは忘れても、己れが顔を廣告しようとする現代の人形遣ひの無遠慮さと無定見さを見せつけられるたびに、寧ろヒシ／＼と一種の反感を抱かざるを得ないのである。

もう一昔前にもならうか、岡鬼太郎氏がたしか「演藝畫報」か何かの文樂東京出開帳の人形評判の中で「そう／＼人形遣ひが出遣ひで御立派でもない御面相を憶面もなく舞臺にさらしたところで女の子に惚れられるものでもあるまい」と氏一流の悪まれ口をたたいてゐられたことがある。尤も最近是人形遣ひの中にも腕前は別問題として、容貌には自信ありげな若い人氣男もゐるやうであるから、今時この話を持出すとムキになつてノーと否定する心臓の強い若い人形遣ひがそんなよそこいらに居さうな氣がするが、人形出遣ひを見ると、大眞面目に取澄して人形を動かして居る御當人には氣の毒ながら、どういふものか私はいつもの毒舌を思ひ浮かべるのである。

一体我々は人形芝居の舞臺では木偶の仕ぐさを見ればよいのであつて、格別珍らしくもない人間の素顔は見なくてもよいのである。出遣ひの場合、人形遣ひの頭の恰好、表情、神

の色合、それ等は肝腎の人形それ自体を押しつけて、用捨もなく我々の視覚にはいり込んでくる。少し古い話であるが、死んだ吉田文三の如き、あの氣張り氣味の表情には恐らく人形の方で顔負けしたことであらう。例へば「芳流閣」の横堀有村の如き、「鎌腹」の七太夫の如き、これを遣ふ吉田文三はまさしく歌舞伎役者の市川文三として今でも眼底に残つてゐる。之れは古人にとつて決して名譽の事でもあるまい。現代に於ても吉田榮三は何かの拍子で尾上榮三として眼にうつる時がないではない。この點で僅に辛抱が出来たのは無表情な、能面のやうな顔の先代玉藏であつた。

これを別に舞台面に就て考へて見る。「聞いてゐるさの障子より」でめい／＼重い胸を抱いて暗い行燈の側らで半七の書置を讀む「酒屋」の情景を擧げよう。舞台の暗さに浸み込んで人形の後にボンヤリ影を投げたやうな黒衣であつてこそ、我々はしめやかな情調にひたつて、この淨曲を十分に楽しむことが出来るのである。これをこの書置のところ、妙に氣取つた、明らかに眼のやり場に困つてゐる人形遣ひの顔が小さい人形の頭の側らに大きく陳列せられてゐる出遣ひの場合とくらべて、人形芝居の舞台としての落付き、情味の上に何と大きな違ひがあることであらう。

流星紋下越路太夫の持場では何か約束があつたのであらうか、人形は決して出遣ひをせず「酒屋」のやうな世話物は勿論のこと、金襴物でもいつも黒衣であつたやう記憶してゐ

る。従つて常にしつとりした氣持でその淨りを聞くことが出来た。只一度おかしかつたことは大正十一年正月興行の中幕で越路が病後復活第一回の語物「市若初陣」を語つたときで、榮三の板額、玉藏の與市、文三の尼將軍其他凡て頭巾の垂れを後ろにはね上げた黒衣であつたが、これが實に珍妙で玉藏や文三の顔はこの頭巾に似合はず折角の「市若切腹」の人形もひどくおどけたものに見えたことがある。その後こんなつまらぬことは再び繰返さないようである。

私はここで先代紋十郎の藝談を思ひ浮べるのである。彼の云ふところを少しく引用して見やう。

「今では太夫が出語りをする、人形遣ひが袴姿で遣るといふ事になつて仕舞ひましたが、あれはどうもいけないと思ひますな、お客様がどうしても太夫を見たり人形遣ひを見る氣になります、人形に情が寫りません、ですから太夫は御簾の内語り、人形遣ひは黒ン坊で遣るのがよからうと思ひます。人形が口を開けば人形遣ひも口を開け、首を振れば首を振る、これは自然遣つて居るとそういふ傾きになるものですけれ共、人形芝居道の法格として厳しく禁じてある位ですから、然し當節ではもう太夫は出語りをするもの、人形遣ひは立派にして出るものとなつたのですから容易に行はれますまいが、成らうものならさうした方がよからうと考へます。私は始終こんなことをいふので仲間同志から餘りよくは云はれませんが、能い法は残して置い

ても改良すべきことはズン／＼改良しなければ益々斯道は衰へるだらうと思ひまして、せめては私一人だけでもまあやつてゐる積りです」

先代紋十郎を「花」の多い藝の持主として、ひどく卑んだ一部の劇評家もあつたようであるが、以上の藝談を讀んで、その心構へはどうして、高く評價せられて然るべきだと考へるのである。

元々人形遣ひも藝人である以上、やつぱり顔を見物の前へ出した、黒衣では折角の妙技を御覽に入れる上に張合ひがない、といふのは一應人情として無理からぬことであるが、人形遣ひはどこ迄も陰の存在として黒衣を本体とすべきであることを忘れてはならぬと思ふ。只道行景事等の場合は出遣ひは許されていいと思ふのであるが、出遣ひか、黒衣か、それは先づ舞台効果を主眼とし、淨曲を本位とし、十分考究の上決定すべき事柄ではないかと思はれる。この點に付て私は最近に於ける一つの生々しい事例を擧げることが出来るのである。

それは十月の文樂本格興行三番目の新作「恩讐の彼方に」の人形である。これは以前にヤハリ織太夫、團六がラヂオで放送をしたのを聞いたことがあるので、私の興味は専ら人形につながつてゐた。眞暗な洞窟に只獨り罪業消滅の悲願に丁々と岩をうがつ白髪の怪僧了海のうら寂しい姿がボンヤリと浮び出るであらう——私はそう期待してゐたのである。とこ

ろがその期待は美事に外れて了つた。照明をうけて除々にそこに映し出されたものは了海の姿ではなくして、吉田榮三の顔が大きくクローズアップされたのである。私は一度に興味のさめて行くのを覺えた。由來名人が人形を遣ふと人形の形ばかり見物の目に入り、人形遣ひの姿は自然隠れるものだからであるが、この洞窟では流石の名人榮三も力及ばず、恰も了海でなしに榮三が穴居してゐたかの如く一瞬見えたのは私丈の僻目であらうか。若しこれが黒衣であつたならば了海初めその他の人形も浮彫のやうにてらし出されて、この新作の舞台を素晴らしく効果的なものにしたであらうと残念に思はれるのである。出遣ひをする語物の選擇に就ては當事者はもつと眞面目に考へて欲しいと切に思つたことであつた。

最後に代役封じのための出遣ひ賛成論について考へて見る。榮三、文五郎のやうな名人級の大立者が黒衣であるからと云つて、病氣其の他の止むを得ない事情があらばイザ知らず、自分の大切な持役を下位の人形遣ひに振向けて安閑としてゐると想像出来るかどうか、果して藝人といふものはそういうものであらうか。彼等は藝に生きる人々である、彼等藝人の名譽のためにも、そこまで無責任な人々であるとは私には到底考へられないのである。又尠くとも現代に於て榮三、文五郎、玉治郎、玉藏、小兵吉、政龜邊りならば、何んと云つても永年たたく込んだ独自の藝があり、藝格があり、持味がある。それは黒衣で遣ふとも隠すべくもないのである。鋭い

見物の眼をゴマ化し得るものでもあるまい。今假りに百歩を譲つて、榮三、文五郎が代役を出したとしたならば、その代役の藝を深く觀察すればよいのであつて、それで一向差支えないことではあるまいか、一日中全部出遣ひで出て貰つてまで、正真正銘の榮三、文五郎であることを見定めなければならぬ必要が何處にあらう。番附と人形遣ひの顔とを一々照らし合せた上でないと、文樂人形の批評が出来ないやうなことでは聊か心細い話である。私はこんなことより寧ろ、出遣ひの「效用」と云つては大袈裟になるが、出遣ひの時は、人形遣ひの舞台の上での不行儀が少しでも矯正されはしないであらうかと考へるのである。某人形遣ひの如き、黒衣の場合の態度の不謹慎さ、行儀の悪るさ、頭巾で顔を隠してゐるのをよいことにして、足遣ひ、左遣ひに露骨に話をしかける、人形自体が静止してゐる時でも人形遣ひ自身は静止状態に堪へ得られないものゝ如く、身体を左右前後に振り動かし、頭を振り廻して客席をあちこち眺め廻すなど、凡そ舞台をおろそかにした行儀の悪い人形遣ひの居ることは、仔細に觀察する者の直に觀取し得るところであらう。これが出遣ひで顔を出す時は、流石人目を恐れて、氣がとがめるかして神妙らしく振舞つてゐることがよく判るのである。いつか夏の舞台で黒衣の人形遣ひが背後から弟子に大きな團扇で裾に風を入れさせてゐるのを見て驚いた事がある。これが出遣ひならばまさか澄ました顔でこの不心得を敢てする圖々しさもあるまい。

出遣ひの一徳は或は僅かにこの邊にあるのではあるまいか。

◇日本橋俱樂部で東都五十義會開催の三日目、素晴らしい大きな紋の羽織を着た志士らしい人物が、幕間に大に辯辯を振つてゐると、廊下で「あれア文部省ごらだ、あんな者に喋べらせて五十義會も無茶だ」と言つてゐる男がある、ふと見ると、なんとこれが、義太夫會でよく見掛ける義太夫ファン？の大橋大人。

◇語り終つて樂屋で一息入れ、いゝ氣持ちでぶらりと表へまはるのを待つて「旦那結構でした」と、ペコリと頭を下げるルンペン連、賞め賞稼ぎに鶉の目鷹の目。

廊下風景

樹綠生

◇道で逢つてあんな男に挨拶をされていゝ恥じかきだ……といふ一紳士、語つた時だけは又別なもの、そのルンペンにほめられて、我から先きに頭を下げ「いやア」とにこ／＼「ご飯でもたべナ」と用意の一封。

◇幕があがると「どこ／＼の重鎮」これは聲の掛け賃らしい、この掛け賃の前稼ぎをした連中は、幕の開くのを待ち、會場の入口から顔だけ出して「ヤアれ待てました、どこ／＼の横綱ツ！」その後は廊下へスツと消えて又も賞め賞稼ぎに右往左往。

高瀬操氏の「沼津」を聴きて

内田 富太郎

濱町日本橋俱樂部の無名會公演で高瀬操氏の「沼津」を聴いて感激させられた。素義も失禮乍らこの境地に迄到達出来れば尊敬したいと思ふ。操氏の「沼津」は靜雅な情韻と枯淡さが全曲にしつとりと流れて法悅的な醜趣味があつた。

聴かせようとする意識的な術氣が微塵もなく、洗練された遊味が渾然と漂つて、誠にしみじみと心靜かに觀賞出来る一段だつた。

謙虚な對度と老熟した語り口は、淨曲即宗教とまで云ひ度い位清澄溫雅で淡々と淨曲の中に溶け込んでゐる藝格は、自我のない理想的な態度だつた。

「沼津」の演出には大体二つあると思ふ。その一つは此の一段を心理的な悲劇として、お米、重兵衛、平作と主要人物の心理葛藤をそれ／＼犀利に内面的に掘り下げつゝ伊賀越快學への道程を精緻に描破する理

智的な行き方と、今一つは秋立ち籠めた沼津の里に、老衰した父平作と、哀れにも美しい妹お米にめぐり逢ひ乍ら浮世の義理に敵味方と別れて、晩秋の夜の千本松原に、父平作の最後を後に別れて行く、抒情的な哀詩として表現する詩的な演出とである。

操氏のは後者に屬する行き方で、しみじみとした詩情が一脈の余韻となつて残る、後口の實に好い沼津だつた。

文樂の榮三と歌舞伎の吉右衛門は、この沼津の「軍兵衛」を商人乍ら如何にも武士も及ばぬ丈夫の魂を持つ若い腹の出來た人物の、宿命的な悲劇として哀切沈痛に表現する。

操氏の重兵衛は「武士も及ばぬ面影は殘念ながら少いけれど」目の鞘拔し商人で、若いが分別のある「ものの」哀れをよくわきまへた情の人として枯淡に描き出して行く、「一々胸にこたゆる重兵衛」にエゲられ

るような迫力はなくとも、「金のやりたい厩托」で切ない重兵衛の心を如實に描き出す。

お米のクドキは哀韻纏々たるもので、「今日や死のふか翌の夜は」の邊り傾城頼川のうらぶれて貧苦の中に夫を想ふ切々の情愛と、兄とも知らずかきクドク女心のいぢらしい哀艶さが流露して妙味深かつた。

この曲の序曲とも云ふべき棒鼻を抒情的に淡々と語り、平作内を情味耽々と語つてから、千本松原で哀咽的な深い悲愁を渾然と漲らせてゐた。殊に「股五郎の落ち行く先」を聞いてから、がつくりと心の重荷を下して、愚に還つたような、親子恩愛の泣きじやくりがたまらなく情懷があつて優れてゐた。

結局操氏のこの一段は情で語り情で人物を浮彫にしながら、一脈の詩情があつて余韻が残る處に何んとも云へない遊味があつた。

道之助氏の健達練成な絃も、つれ引の越道氏と共に好く沼津の情趣を掴んで良き伴奏者としての實を立派に果してゐた。

浮城山漫話

金王丸

東京古老

〔十月三十一日〕

伽羅先代萩

政岡忠義の段

竹本都太夫

絃 野澤 条造

文樂中堅

〔十月十六日〕

菅原傳授手習鑑

佐太村の段

竹本大隅太夫

絃 豊澤 廣助

我が大器晚成居士大隅太夫君、痛めつけられてゐた道八翁に代つて、絃が廣助師になつてから、此の前の放送「戻り橋」の綱や、最近東上文樂では、毛谷村の杉坂墓所や、廿四孝の景勝下駄などで、殊の外評判が好かつたは、先づ、何よりと喜んでゐたものである。さて當夜の「佐太村」聴く前には、或は此の人には良い演し物を探し當てた、と思つて、徐ろにスキツチを入れる。と、豈圖らんや、弟知らんや、年は寄つても怖いは親、からの訴訟の間は、松王丸の勘當願ひに吹き出すやうな白太夫の笑ひなど、中々味で、結構

な出来であつたが、愈よ聴き所の櫻丸の出からに至つて、極言すれば、醜態を暴露し始めた。アレ〜〜〜と思ふほど調子が外れ、いとも怪しい聲が出る。第一、櫻丸の詞が、一つも二つも低いので、中年の男にきこへ、八重が姥櫻になりさうであつた。白太夫も熱意か、研究の不足の爲めか、あまりに一介のお百姓になつてしまひ、前の訴訟の間の松と梅とを叱りつけるだけの一徹な強氣皆無は、考へ違ひではあるまいか。廣助師の絃が大隅氏の調子を外させたのは、駒が少々輕過ぎたのではあるまいか。介錯の鉦の音から以下は段切まで、中々よろしいとおもつたが、要するに、先師得意のものながら今の太夫には、この佐太村は、藝題の選擇をあやまつたものかと思ふ。

条造さんとのコンビは四年振りとかいふ。近頃お弟子の御連中も盛んなので、自然、藝道の勉強も出来るらしい都太夫師、今回はグツと品好く、先代の御殿である。オクリから直ぐ後半の、榮御前の出になつて、まゝ焚のダレ場を逃げ、充分に聴かせどころを捉まへて、四十分といふ餘裕のある時間を、どう延ばすかと聽いてゐると、いつもの「さすが女の愚にかへり……」の後、本格的に八汐の最期を語り、さては、床下の鼠の件、仁木が現はれるかとおもふと、丸本の大詰にある「庄司重忠喜悅の眉、おゝ出かしたり〜」と來て「千代の榮へを鶴喜代の威勢は旭の昇るが如く、げに神國の人心、頼母しかりける……」と誰れも初耳であらうめでたし〜の段切りを付けてチョン

は氣の利いたやうな、又をかきなやうな勉強であつた。ノツケに我等が氣に入つたのは、榮御前の調子の結構であつた事、殆んど近頃聴いた事のないほどの嵌つた演出、政岡も、存外、といつては失禮だが、品位相當、八沙も大緊張の、ドスを利かせて夫々によく『まことに國の』からの肝心のクドキは、普通當然の出來といふ處であつた。故朝太夫一黨の、今は殆んど一人となつた都さん、その健在健闘を悦び祈る。

元文樂庵

〔十一月八日〕

卅三所
花の山觀音靈驗記 壺坂寺の段

竹本 土佐太夫

絃 野澤 吉兵衛

ツレ 野澤 市松

名人大隅と團平のコンビで叩き上げ、弘めに廣めた當時の新作「壺坂」は三つ違ひの兄さんで、淨るりなんと本式に聴いた事も無い現代の兄さん、嬢ツちゃんでも知つてゐる名曲であ

る。その名人兩師から、親しく承け繼いだといつてよい土佐太夫が、今や第一線を退いて、我等文樂黨に、深い寂寥を感じしめてゐる時、彼れの最も良き同伴者吉兵衛の絃で、ラヂオとしては、時間も相應に貰ひ、邦樂『名曲の夕』のしんがりを承はる。寔に聴くに値する、聴かすんばあるべからざる一夜であつた。さて要らざる前置きを長々と書いてしまつたが、如何でした土佐さんは、と訊ねられた我等、言下に、近頃結構な壺坂だつた、と答へたものである。先づその語り出しの「まゝの川」イヤ「夢が浮世か浮世が夢か」から、現代の誰れもが殆んど言へぬ本格的の小事を聴かせて呉れる。御約束の三つ違ひの兄さんのサハリは言はずもがな、ともすれば、老けやすく、さては、堅くなり、或は、色つぼ過ぎる誤ちに墮するお里が、實に、此の曲中の若き世話女房になり切つてゐたのに驚かされる。後段、山へ行つてから、あア氣の毒だなア、と心から同情を禁ぜぬほど屈かぬ聲もあつたりしたが、岩を建て水をたゝへての御詠歌も昔なが

らに聴かれた悦ばしさ、途中の口三味線を以て唱ふアノ條りを抜いたのは時間の都合なるべきも、其他一二ヶ所殆んど氣づかれぬ程度に飛ばされたのも研究の末かとうなづかれ、殊にハツとばかりに、同聴者と顔を見合はして絶讚したのは、二度目にお里が戻つて來て、澤市の見えぬをいぶかり、先づ何氣なく澤市さん、と呼び、更らに調子をツメて澤市さんと叫び、次第に、不安焦躁のイキを作る巧さ、轟々と我等の耳朵と心魂を打つた事である。茲に至つて、殆んど絶對的に賞讚してよいものであると思つた。吉兵衛師の絃は我等が久しき以前より推賞措かざる所、久し振りに心ゆくまで樂しませて貰つて感謝に近い氣持と同時に、此を失つた文樂に、惜しくはないか、と言ひたいものが込み上げて來る位であつた。お里を歸してから澤市が、死所を求めて、上る段さへ四つ五つ、のあたり、此の絃が物を言つてゐて、榮三の人形が動いてゐるのを髣髴させたものである。金王丸久し振りに滅茶苦茶に賞めちぎる事かくの如し矣。

熊谷の地名と人名

中野三九

固有名詞は固有名詞で發音上異説の生ずる理由のない筈だが、扱て左様簡単に片付ける譯に行かぬ……といふは、その固有名詞が判然としかねる場合があるからだ。例へば忠臣蔵の「扇ヶ谷」の「谷」は「ヤツ」だが、土俗は「ヤト」と訛つて居る、鎌倉方面には大小の所謂「谷」があるのでそれを「ヤト」と呼んでゐるのだ。また「谷」と關係がないが伊豫の「今治」も「イマハル」と單なる文字の上からは呼ぶべきが常識のやうだが、元來は「イマバリ」「イマハル」であるといふので「イマハリ」「イマバリ」「イマバル」など様々に呼ばれてゐたのを大正十年九月八日に市會で「イマバリ」と

一定すべく可決、今治驛と今治郵便局では大正十三年に「イマバリ」と呼ぶことになつた（今治驛は大正十三年二月十一日開通と同時に）やうな次第で、でも公式以外には現在でも「イマハル」と呼ぶ方が多いとの

ことである。若し今治某といふ人物が居つたとして、それが地名に因んで名乗つた姓であつた場合、從來「イマハル」であつたとすれば之れを「イマバリ」と改めるか何うか。

扱て「東鑑」に治承五年六月下文、武藏國大里郡、熊谷次郎高實、所定補所領事、云々、一人當千、顯高名、其鑑賞、件熊谷郷地頭職成畢云々……とある如く、熊谷の姓と熊谷の土地の稱呼は元來同一であるべきだが、土地については今日は公式には熊谷市、熊谷郵便局、熊谷驛に對し、私は往復はがきで照會した其返事「クマガヤ」KUMAGAYAである。

小學校の教科書を調べると地名は「クマガヤ」で人名は「クマガイ」だ。熊賀屋と地名でなく人名に用ゐた俗書もあるといふが、地名人名共に「クマガヤ」なら世話なしだが、さう簡単に済まないとい

ころに惱みがある。

四谷、市ヶ谷、雜司ヶ谷、山谷と手近な東京の例を引用するまでもなく地名には多く「ヤ」が用ゐられる。

「空華集」に「若夫熊谷平山二氏壽永間爭先於一谷之夜、其名顯耀于國史、鏗鉦乎宇宙、武之人至今以夸是其特者也」とあるところの熊谷の相手の平山は出身の地名と同じで、現に京王電車の平山といふ停車場がそれだが、平山は「ヒラヤマ」で熊谷の如く訛られる嫌がない。

熊谷の姓は熊谷の土地に因んで出來たに相違ないが、扱て其熊谷の地名は何處から來たか、「ドイツ」の「ベルリン」は昔熊谷に住んでゐたに因んで出來た稱呼と聞くので、秩父の山奥に今でも熊が居ることなど稽へると、矢張り熊が往來したに相違ない、また熊谷と遠からぬ松山在の吉見の百穴は「コロボツクル」の遺跡だから有史以前から傳はる稱呼に熊谷の字を宛てはめたのかも知れぬのである。

更に説をなすならば世俗としては往々茶目氣分で態と異なる呼名を以て應答する、私が大正十四年の二月に大阪の惠比壽橋から電車で元の御靈の文樂座に出かけた時車掌

が日本橋(大阪の)を「ニッポンバシ」と呼ばずに「ニホンバシ」と呼んでるのを異様に感じたことがある熊谷若くは熊谷在の人達の間では「クマガヤ」「クマガイ」(ヒ)、「クマガエ」(ヘ)、「クマガエ」と様々の呼び方をして相通せしめて居る。改めて調べもせぬが、「クマガエ」は奥淨瑠璃式の發音で、所謂坂東腔としては「クマガエ」が固有音であつたかも知れぬのだ。

國民教育の普及に加へて、發音上には「ラヂオ」の影響が多である今日、地方的訛音が長年月間に整理されて行く傾向がある併し世界的に見ても「ラヂオ」では西班牙の都を「マドリッド」と呼んでるのに新聞記事には多く「マドリツド」、伊太利は本國語で「イタリヤ」と呼び、「ラヂオ」でも「イタリヤ」といふてるのに新聞の多くは今でも「イタリー」と英語讀みにして居る位で容易に一定出来ない。

- 更に一般的に外國の地名に眼をやれば
- 一、(伊)「ヴェネチーフ」(英)「ヴェニス」(獨)「ヴェネディツヒ」
 - 二、(伊)「フィレンツェ」(英)「フローレンス」
 - 三、(露)「モスクヴァ」(佛)「モスクー」

- (英)「モスコ」
- 四、(英)「ロンドン」(佛)「ロンドル」(伊)「ロンドラ」
- 五、(佛)「パリ」(伊)「パリーゼ」人名にしても

- 一、(獨)「ワイルヘルム」(英)「ワイリヤム」
- 二、(英)「ヘンリー」(獨)「ハインリツヒ」
- 三、(英)「カザリン」(露)「エカテリナ」(獨)「カタリナ」

等、たゞ思ひついた例を擧げたのだが、是等は本國語を使ふのを原則となすべきだと思ふのに、區々である。

歴史上の人物の固有名詞を後世からは正するは問題である、由來埼玉訛りは「イ」と「エ」を顛倒する、その好適例として埼玉の縣會議員の十人が恐らく十人委員長をエエン長と發音するに徴し、思ひ半ばに過ぎんだ。

そこで熊谷の姓は文字讀みの正否は兎に角「クマガエ」(ヘ)、「クマガエ」であつたと思ふ、それ以後世から「クマガイ」(ヒ)に是正されたのではあるまいか。

小學教科書では「紫宸殿」を「シシイデ

ン」と讀まずに「シシンデン」といふ讀み方にしたが、國語に關する専門家の多數意見から來たのだから致し方ないが、私は「シシイデン」と呼び做して來たものを變改する要を認めぬと思ふが如何のものか。

謡曲本では「クマガエ」といふやうであるし、文樂で「クマガエ」といふ此「エ」は「ヘ」に通じて居るのかも知れない。

結論として固有名詞は假りに誤りがあつたとしても、歴史上の人物としてそれで通つて來たものはそのまゝにして置く方が、其時代が連想されてよいのであるまいか、太功記の「木下」を「コノシタ」といふたり、「明智」を「武智」と改めたりして居るのは故意にさうしてあるのだと諒解して居るから正史と比較しての問題が起らぬのだが、熊谷はそのやうに正史と淨曲とをハツキリ區別した場合でないので問題となる。人名ではないが地名として(參考となるのは「戀娘昔八丈」……鈴ヶ森の段……に「餘り待つたで寒なつた、砂水の茶屋で一抔せう」の砂水の「さみづ」は最初鮫頭であつたのが砂水、それから鮫洲となつたのだから、現在に改めれば鮫洲であるべきものを

砂水で語る、私も矢張り之は砂水時代に出
来た淨曲として砂水で語るを當然と心得て
居る。

熊谷の方はちよいとした訛りの問題だか
ら砂水のやうにハツキリしないと同時に、
力瘤の入れ方も鈍る次第である。

謡曲本の「クマガヘ」をも訛りの内に入
れて片付けてよいか、或は別に説があるか、
世阿彌あたりを地下に起して聴いて見たら
とも思ふのである。「平家物語」の振假名に
も「クマガヘ」とあるから、強ち訛りとの
み片付けられぬかも知れぬ。

最後に私は念の爲め熊谷市にある熊谷寺
に照會し印刷物を送られた中から參考とし
て左に抜萃する。

「地名の由來と、その正しい讀み方は
どう云ふのですか」「いろくむづかしい
學説もある様ですが、大昔この土地に巨
熊がゐて、人畜を害した事から地名を、
熊谷と稱えた」と云ふ事です。

(中略) 讀み方は、ほんとはクマガイの
由ですが、官公署讀みとしてクマガヤと
定められ、市、驛、測候其他何れもこの
呼稱を使はれてゐます」

「熊谷直實公と、この街とは、どう云ふ

關係なのですか」

「丁度只今から七百九十餘年前、直實公
のお父さんの直實公といふお方が、土民
の難儀を救はんと決死の覺悟で、その巨
熊を、闇夜に洞穴を襲つて、單身退治し、
その功により、この近郷三百町歩を拜領
し、その時から熊谷と云ふ地名を、我が
名とする事を許され、分り易く云へばこ
の熊谷の領主になつたので云々」
「闇夜に洞穴を襲つて」とは熊を人間扱ひ
にした説明だが、それはよいとして兎に角
以上の通りである。

結論としては長い物にはまかれろも妙な例
へだが地名は「クマガヤ」、人名はクマガ
イ」に落ちついて仕舞ふのであらう。たゞ
發音の關係からいへば「クマガイ」は「イ」
といふとき一個の努力を要するが「エ」「エ」
「へ」は「ガ」から讀くときに「イ」の場
合と比べて容易である。語るときは特にさ
うであるのだといふ點に考慮を置かねばな
らぬ。

本篇は「淨曲研究」掲載の爲め執筆した
のであるが、だんく文句が長くなつた
ので狭隘なる紙面の同誌に遠慮し別に要點
のみを纏めた短文を草した。従つて獨立の

文章としてはモット書きたいのだが、「淨曲
研究」に他の諸氏の引用したものと重複す
るは可成避けるに努めた次第であることを
諒とせられたい。

往年熊谷寺に詣つた時の記事は俳誌「芭
蕉」に發表したが、中に境内で犬の囀み合
ひを見て詠んだ腰折れを一つ懐ひ出した。

おのれより小さき者囀む犬見れば熊谷次
郎止めよと叱りつ
三九
(二四、一〇、二七)

「うたふ」と

「かたる」と

三 允 生

「淨曲研究」第九號に「北海道にて」
と題せる岡田蝶花形氏の短歌三百中二
首

歌つくる阿部と義太夫うたふわれと
二人たのしや旗亭若柳(函館)

札幌の東京庵にタイムスの社長の前
にうたふ義太夫(札幌)

「うたふ」は「かたる」と改めた方が
よいと思ふが如何。

部樂俱橋本日於間日三りよ日八十月十年四十和昭

第卅一回 東都五十義會秋季成績

同	同	同	同	同	同	同	前頭	小結	關脇	大關
一四	一四	一四	一四	一五	一五	一五	一五	一五	一六	一六
四五	四五	四八	四九	五〇	五一	五一	五四	五五	六〇	六一
二五	二五	七五	七五	二五	二五	二五	〇〇	〇〇	三三	六七
菅	木	國	霧	佐	須	大	佐	杉	細	及
原	下	森	島	野	藤	坂	藤	本	川	川
葉	松	鳴	錦	美	米	枝				
光	玉	門	司	昇	司	旭	蝶	英	清	旭

同	同	同	同	同	同	同	同	同	前頭	
一二	一三	一四	一四							
二九	三〇	三〇	三四	三五	三五	三五	三八	三八	四一	
二五	二五	七五	〇〇	〇〇	五五	七五	〇〇	〇〇	二五	
高	酒	富	高	櫻	宮	和	小	安	奧	上
木	井	岡	橋	井	本	田	池	藤	村	杉
龍	小	生	清	文	百	金	都	三	文	
鳳	靜	昇	光	榮	塚	扇	司	竹	玉	盛

賞入	同	同	同	同	同	同	同	前頭			
三	二	一	一	一	一	一	一	一			
等	等	等	〇	〇	〇	〇	〇	〇			
等	等	等	〇	〇	〇	〇	〇	〇			
森	中	安	杉	高	大	青	阿	眞	安	中	三
山	山	山	橋	場	木	部下	藤	山	口		
市	國	都	富	藤	大	初	柳	國	松		
菊	華	竹	磯	徳	八	和	一	晉	正	華	藤

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一四	一四	一四	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一六	一六
四五	四五	四八	四九	五〇	五一	五一	五四	五五	六〇	六一
二五	二五	七五	七五	二五	二五	二五	〇〇	〇〇	三三	六七
須	井	森	新	田	野	國	橋	村	中	野
田	上	井	中	田	友	本	田	田	村	
美	龜	市	よ	吞	高	東	三	玉	五	乃
義	鶴	菊	づ	笑	尾	光	司	寶	口	菊

查	審	
高	安	吉
瀨	藤	田
操	光	三
	榮	芳
	久	

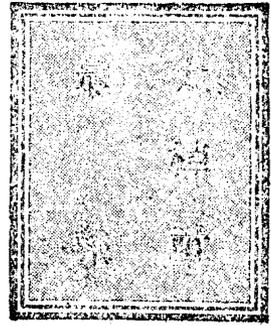
技	總	
豐	星	後
澤	野	見
猿	桔	
之	梗	
助		

副	會	
高	細	長
瀨	川	
操	清	

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一四	一四	一四	一五	一五	一五	一五	一五	一五	一六	一六
四五	四五	四八	四九	五〇	五一	五一	五四	五五	六〇	六一
二五	二五	七五	七五	二五	二五	二五	〇〇	〇〇	三三	六七
須	井	森	新	田	野	國	橋	村	中	野
田	上	井	中	田	友	本	田	田	村	
美	龜	市	よ	吞	高	東	三	玉	五	乃
義	鶴	菊	づ	笑	尾	光	司	寶	口	菊

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	前頭
一二	一三	一四	一四	一四						
二九	三〇	三〇	三四	三五	三五	三五	三八	三八	四一	四二
二五	二五	七五	〇〇	〇〇	五五	七五	〇〇	〇〇	二五	七五
小	飛	藤	村	戸	村	角	玉	鈴	影	錦
泉	石	本	山	山	井	水	木	山	山	山
柳	か	喜	紫	い	津	美	吟	其	淺	錦
汀	め	鳳	水	を	津	美	豊	青	芳	路

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	前頭
一〇	一一	一一	一一	一二						
五〇	五五									
〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇
林	細	早	田	齋	木	南	笠	富	久	保
秀	梅	綱	喜	玉	一	壽	清	紅	田	喜
玉	笑	路	昇	鳳	司	光	芳	隅	鶴	



第一回五芳會

前號既報の通り、豊澤芳太郎師の爲めに組織された五芳會の第一回は、田畑千壺氏病氣にて缺演の爲め、掛合役割一部變更左の番組により、十一月八日午後六時より丸の内電気俱樂部新講堂に於て開催された。

大日本素人淨瑠璃會

大阪に於ける大日本素人淨瑠璃會は、前號既報の如く、十一月十二日より三日間堀江演舞場にて開催されたが、太夫竹本大隅太夫、竹本鑛太夫、竹本文字太夫、三味線鶴澤叶、豊澤團友、豊澤仙糸、素

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。
 ▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。
 ▽特種の催はしの外前置きを略します。

—記者—

太十(掛合) 十次郎(淀橋) 初菊(愛水) 操(里芳) 臯月、光秀(茂里雄) 先代(里芳) 逆禰(淀橋) 十種香(愛水) 忠六(茂里雄) 野崎村(掛合) お光(茂里雄) お染(愛水) 久作、久松(淀橋) 母(里芳) 絃(芳太郎) (猿喜知、美之助)

義伊東柳平、笹村ふんど、萱林松玉の三系 続九氏審査の結果得點並に入賞左の通り
 金聲(一七九、九) 利生(一七九、〇) 生樂(一七六、七) 出雲(一七四、〇) 重司(一七一、一) 小若(一七〇、

- 六) 飄樂(一六九、七) タツミ(一六
- 一、五) 貴道(一六一、一) 登一(一六
- 〇、四) 千鳥(一五八、〇) 紫幸(一五
- 六、八) 泉(一五六、四) 鶴峰(一五
- 三、一) 稻雀(一五〇、六) 紅司(一五
- 〇、三) 米笑(一四九、〇) 榮四(一四
- 七、九) 花昇(一四六、七) 松風(一四
- 五、四) 小富士(一四五、三) 三樂(一
- 四五、〇) 平遊(一四〇、七) あしべ
- (一三九、九) まつ尾(一三九、四) 永
- 寶(一三七、八) きく水(一三五、九)
- 飄月(一三四、八) 高砂(一三三、一)
- 十九壽(一三〇、八) やまと(一二七、
- 三) 華遊(一二九、二) 錦司(一二七、
- 九) 璃鶴(一二六、四) 晴山(一二六、
- 三) 小昇(一二六、一) 一蝶(一二五、
- 八) 千世喜(一二五、八) アリオ(一二
- 五、四) 大和(一二三、六) 里昇(一二
- 三、一) やなぎ(一二二、八) 藤政(一二
- 二、六) 長生(一二二、五) 東升(一二
- 二、四) 直勝(一二二、一) 白水(一二
- 二、〇) 淡路(一二二、〇) 榮糸(一二
- 二、四) 一枝(一二〇、九) 貴昇(一二
- 二〇、七) 三升(一一九、九) 大彌(一一
- 一九、八) 吟青(一一九、〇) 可笑(一一
- 一九、〇) 和鳳(一一八、一) 飄(一一
- 一八、一) 琴城(一一七、八) 轟(一一
- 七、五) 芳玉(一一六、六) 數島(一一

五、三)三調(一一三、六)十九集(一一
 三、一)鳳(一一二、二)錦(一一二、一)
 榮鳳(一一〇、四)錦城(二〇八、四)左
 文字(二〇六、九)河榭(二〇六、九)
 大鏡(二〇六、三)暫(二〇六、一)標
 瑯九(二〇五、九)小松(二〇四、二)
 透昇(二〇三、〇)柳司(二〇二、八)
 岩戸(九九、二)麒麟(九八、〇)翠光
 (九七、八)萬兩(九六、一)一港(九
 五、一)丸大(九五、〇)春清(九一、
 五)春洋(九一、三)梅龍(八六、二)
 春嶺(八五、二)都號(八三、七)
 入賞—貴昇(一等)やなぎ(二等)榮
 糸(三等)……賞狀(白水、藤政、大彌、
 里昇)

淨曲鳥の會の復活

鈴木兒雀、栗原千鶴、片山つばめ、塚
 口清雀、中島山鳥の五氏がその雅號鳥の
 名に因みて鳥の會を組織、第六回以後久
 しく休演中であつたが、今回復活して麻
 布公會堂に於て十一月十九日午後五時よ
 り第七回を開催、都合にて休演の山鳥氏
 に代りて庵井筒氏がかもめの號にて出演
 せられ、定刻には満員の盛況を呈した。
 組打(かもめ、勝八)陣屋(清雀、辰
 六)壺坂(つばめ、玉勝)四谷怪談(兒
 雀、辰六)忠九(千鶴、觀西翁)

素玄淨曲研究會

十一月廿九日午後六時より等一徵兵保
 險講堂にて第十五回を開催。
 太十(有樂、團市)合邦(梅笑、東太
 夫)先代(素風、辰六)陣屋(千晴、團
 市)壺坂(駒登太夫、猿藏)

日本帝都義太夫因會大會

日本帝都義太夫因會男子部は前號既載
 の通り、去月役員改選、會長に豊澤猿之
 助師が就任し、同會發展の基礎に一輝光
 を點じた感のあるその猿之助師就任初の
 大會は、十二月十四日正午より日本橋俱
 樂部に於て開催される。番組は左の通り
 十種香(掛合)(八重垣姫、都太夫。勝
 三郎)合邦(東太夫、猿三郎)忠四(津

互調會の伊豆行

齋藤山生、野口みなと、川田二三樂、
 岩木義雀、乃村乃菊の五氏を以て組織さ
 れてゐる互調會は、十月廿一日伊豆に遠
 征、午後五時より伊豆海會館に於て義太
 夫會を催はし、頗る好評を博した。
 鳴門(山生、鹿重)十種香(みなと、
 良造)寺子屋(二三樂、蝶子)太十(義
 雀、良造)沼津(乃菊、佳照)

大阪文樂座十二月興行

西村紫紅氏作

紅葉狩の上演

大阪文樂座人形淨瑠璃の十一月は太夫三味線人形總出演の下に、吉例霜月顔よせ興行として四つ橋文樂座に於て華々しく開演したが、十二月は竹本鉸太夫を上置きに若手の一黨を以て左の番組に依り十二月一日初日開演をした。

三。播路太夫、新太郎)切(鉸太夫、寛治郎。琴、綱延)
曲輪文章||吉田屋(夕霧、南部太夫。伊達太夫。伊左工門、伊達太夫。南部太夫。喜左工門、和泉太夫。おきき、呂太夫。若い者、千駒太夫。竹太夫)(重造ツレ友工門、清友、一郎右工門、龍市、綱延)

大阪人形淨瑠璃文樂座は、十一月一日初日四ツ橋文樂座に於て、吉例霜月顔寄せ大興行を開演し、伊賀越の通し並びに白石噺の外大切に西村紫紅氏作「紅葉狩」を上演した。紫紅氏は關西素義界の重鎮である事は、本誌が喋々する迄もななく辱知の通りである。

豊澤芳太郎氏の

『松のみどり』發行

淨曲三絃界の巨匠豊澤松太郎師一代の名編「松のみどり」の世に發表されんとする寸前、彼の大地震の爲め烏有に歸した事は、斯界に於ける一大損傷として遺憾とされてゐる處であるが、師逝いて茲に一年、豊澤芳太郎氏は亡父一周忌の供養にもと、亡師の初舞臺を勤めし翌十二歳の時の三都太夫三味線操見立鑑(慶應四年四月發行)を始め、明治二年頃よりの古き多數の番附に同師出演年表並に略歴を添え、なほこれに竹本朝太夫の略歴をも加へ、題號も思ひ出深き「松のみどり」と名づけて小冊子を發行された。

假名手本忠臣藏||大序兜改めより戀歌まで……直義公、さの太夫。宮太夫。師直、駒若太夫。相瀬太夫。顔世御前、津磨太夫。越名太夫。若狭之助、松島太夫。英太夫。判官、松島太夫。英太夫。(友花)下馬先進物(長尾太夫、叶太郎。富太夫、友十郎)殿中(和泉太夫、叶)裏門(さの太夫、友若。津磨太夫、寛若、宮太夫、友太郎)道行……(戸無瀬、相生太夫。織太夫。小浪、南部太夫。伊達太夫)ツレ(辰太夫、播路太夫)(さの太夫、津磨太夫)(駒若太夫、相瀬太夫)(松島太夫、英太夫)(重造、友工門)(八造、團六)(團伊三、新太郎)(清友、一郎右工門)(龍市、吉藏)山科閑居前(相生太夫、清二郎。織太夫、團六)奥(呂太夫、新左工門)

房駕色相肩||斷嘶(次良作、伊勢太夫、竹太夫、與四郎辰太夫)仙糸(喜代之助、八造、友太郎、友十郎)(團作、仙松)
同會は森三好氏上京満七ヶ年を祝し、十月十五日夕より小石川俱樂部に於て祝賀義太夫會を催ほし、なほ十一月廿日同俱樂部にて左記番組に依り午後五時より開催。
太十(時昇、清勝)辨慶(岡玉、清勝)日吉(喜三香、三好)寺子屋前(美蝶、三好)野崎(三好彈語り、ツレ喜三香)寺子屋奥(清勝、三好)

艶容女舞衣||酒屋中(千駒太夫、團伊

乃村乃菊氏を祝ふ會

乃村乃菊氏が斯道に精神振りの目立つて来た



此の榮譽を獲得せられた乃菊氏の爲めに、互調會の諸氏は十一月四日より、駒形俱樂部に於て「祝賀義太夫會」を催はしたが、席上齋藤山生氏は左の通り挨拶をされた。寫眞は向つて右より前列の中央が竹本佳照、乃村乃菊、中列は互調會の齋藤山生、川田二三樂、野口みなと、岩木義雀の諸氏

齋藤山生氏の挨拶

今晚は御多忙中御來聽下さいまして有難く御禮申上ます。扱今回乃村乃菊氏は帝都第一位であり、且又全國的にも有名であります所の五十義會に於て東の正大關の榮位を勝ち得ました事は、同氏の爲め非常に御慶び申上る次第であります。茲に於て同氏の心境並に其の經過に就て少しく御話申上げ御挨拶に代へ度いと存じます。

御存じの通り五十義會と申せば全國誰れ知らぬ者も無い有名な大會でもあり、且又三日間に亘り六十餘名の競演會でありまして、其の採點の結果最高點となり

ましたのでありますから、本人の身となりますれば何と形容して良いか解らない程嬉しかつた事は御察しするに餘りある次第であります。

去れど同氏の申されますには元より大關になるとか、或は自分は大關の資格があらうとか云ふ様な已惚れは全くなかつたので、否大關になつた今日に於ても尙以てそんな已惚れは毛頭持つて居らないのであります。只當日「吃又」を一生懸命夢中になつて語つた丈で、後で最高點と聞かされた時は全く自分乍ら意外でさへあつたとの事でありました。然し乍ら同氏の語られる全部の義太夫が其の資格あるや否やは別問題として、兎に角公平を主とする五十義會の事でもあり、且又永年斯道に於て研鑽を重ね自他共に許されたる權威ある審査員の方々の公平なる審査の結果得た賜でありますから勿論其の時の「吃又」に最高點なるべき資格は充分現れて居た事は全く疑を入れざる所でありますが、又之れは當然であつたかと窺はれる點が充分あると思ふのであります。それは此の「吃又」は大阪より呂太夫師が上京の都度之れを熱心に教へ全く文字通りの血を吐く思ひで稽古に丹精を凝らした甲斐が、其の際無我の境に於て其の資格が充分に現はれた事と信ず

るのであります。
尙同氏も今後一層之れを辱しめない様努力邁進すると申されて居りますが、右の

第三回 批評する會・される會

如き同氏の心境を一寸話して御挨拶に代へ度いと存じます次第であります。

今回より淨瑠璃同風會と政稱された「批評する會される會」の第三回は、十一月廿六日午後一時より麻布公會堂に於て開催。今回は二階の日本間で催ほされたが、新聞にも發表されなかつた爲めか、いつも見受ける厭やな定連は一人も來ず、批評に専念さるゝ諸家と素義の有志を以て會場は滿員の盛況を呈し、玄人も都太夫、殿母太夫、津彌太夫などの二三の顔も見え、斯界の催ほしには珍らしい緊張とその風景は、同會の趣旨を遺憾

第十八回 竹本素女公演會

日本帝都義太夫因會女子部の理事長として東都の女義向上に努め、ある時は自己の素女會を犠牲にし歌舞伎座又は明治座の大劇場に女義の進出を試み、或は大坂へ遠征する等々、素女ならではの帝都義太夫界の玄素を擧げて絶讃を博した竹

なく發揮され、又、會場も頗る落付いて氣分滿點の好評であつた。

紙治(痴樂、團八) 壺坂(三玉、龜造) 陣屋(素鳳、辰六) 阿漕(團壽、龍) 金閣寺(子太郎、和孝) 河庄(茶、市之助) 柳(豊、清松) 寺子屋(龍鳳、昇登) 鮎屋(松玉、彌國太夫) 野崎(桔梗、辰六) 寺子屋(貴昇、猿藏) 安達(國聲、猿三郎) 合邦(高尾、駒登太夫)

本素女師は、今秋明治座開演の事より紛擾をかもすに至り、遂に「自分は倒底理事長としての器に非ず」と、ボンと職を投げ出して同會の平會員の氣輕るさに復へり、久々に素女會第十八回を來る十二月十二、三、四の三日間仁壽講堂に於て

毎夕五時より開演する事になつた。三日間の語り物は左の通り。

(十二日) 蝶八(素國、素丸) 柳(素廣、猿昇) 佐太村(重子、勝八) 揚屋(彌周、三生) 鮎屋(越駒、紋教) 鳴戸(素八、三平) 十種香(小津賀、紋教) 壺坂(素昇、猿玉) 合邦(素女) 大井川(素次、素一)
(十三日) 八陣(素國、素丸) 宿屋(素八、三平) 陣屋(素昇、猿玉) 野崎(素廣、猿昇) 近八(重子、勝八) 新口(小津賀、紋教) 妙心寺(彌周、三生) 太十(越駒、紋教) 沼津(素女) 鈴ヶ森(素次、素一)
(十四日) 日吉(素國、素丸) 松王郎(彌周、三生) 紙治(越駒、紋教) 忠六(素八、三平) 重の井(小津賀、紋教) 酒屋(素昇、猿玉) 先代(素廣、猿昇) 吉田屋(重子、勝八) 寺子屋(素女) 御所(素次、素一)

淨曲無名會

十二月八日電氣俱樂部に開催。
伊賀五(揆、道之助) 吉田屋(長平、龜造) 寺子屋(どくろ、司好) 酒屋(美峰、猿之助) 忠七(國聲、猿三郎)

日本帝都義太夫因會

女子部の役員

日本帝都義太夫因會男子部役員改選の結果は前號既載の通りであるが、同會女子部も去月十日義太夫先祖先祭尙日並木俱樂部に於て投票を以て役員の改選を行つたが、その結果は左の通り。

委員長(鶴澤清一) 委員(豊澤猿玉、鶴澤紋教、竹本佳照、豊竹若好、竹本東朝、竹本重子、竹本小津賀、竹本素昇、豊竹駒清、竹本染登、竹本彌周)會計(竹本佳照、豊竹若好)

秋田湯本

義太夫會

秋田湯本町には喜美太夫後援會が組織されをり、義太夫花びし會主催にて平市の素義連並に東京鶴澤蟻鳳師の後援のもとに、十月廿三日午後五時より三函座に於て、左記番組に依り秋季義太夫會が催ほされた。

鈴ヶ森(初音、おもちゃ) 太十(喜久

保) 酒屋(秀千代) 先代(多喜子) 朝顔(兒太郎) 揚屋(小玉) 壺坂(喜福) 以上絃(喜美太夫) 合邦(松枝、友千代) 又助(喜樂、喜美太夫) 寺子屋(夏井、蟻鳳) 辨上(友千代、才司) 安達(ひさご、蟻鳳) 大切太十(競演墨附) 樂屋總出演。

京城 義太夫大會

京城に於ける同業朝鮮文藝社主催のもとに、國民精神作興週間實施として、十一月八日午後六時より、本三俱樂部で義太夫大會が催ほされ、左記出演諸氏に依り力演された。

先代(竹本東) 新口村(忠兵衛、あづま、孫右工門、秀清、梅川、柳清) 絃(東廣) 太十(美名登、梅若) 忠六(母親、貴勢) 郷右工門、あづま、彌五郎、柳清、勘平、かすみ) 絃(東) 寺子屋(北圓、梅若) 野崎村(久作、秀清、久松、北圓) お染、貴勢、お芳、かすみ、母、あづま、お光、錦) 絃(東廣、ツレ、東)

松葉家音譜吹込豫約

松葉家音譜普及會では、發賣中の既製品は五十餘段に達し、今回又々左記新譜吹込みの申込みが多數あるので、目下原料統制中の事として、一ヶ月一種宛「吉田屋」より順位に吹込む豫定の由である。

吉田屋、毛谷村、阿漕、吃又、瀧、橋本、四谷怪談、鈴ヶ森、三日太平記、先代、妙心寺、蝶花形、忠三(殿中より裏門迄) 日蓮記、聚樂町、湊町、布四、春掛村、市若初陣、草履打(以上)

文樂 淨瑠璃の夕

東上文樂座の人々

十一月廿七日より三日間、九段軍人會館に於ける「文樂人形淨瑠璃の夕」に出演の爲め東上した文樂座太夫三味線人形の人々左の通り

太夫(源太夫、さの太夫、土佐夫太夫、伊達太夫) 三味線(八造、友花、友三郎、龍市、友衛門) 人形(紋十郎、文二郎、紋昇、玉市、紋太郎、玉男、光之助、玉幸、紋司、文之助、文枝、玉徳、兵次、政龜、玉枝、兵二郎、紋之助、萬次郎、文五郎) 以上順不同

舞踊「踏紅會」に

出演の太夫、三味線

栗島すみ子主宰の舞踊「踏紅會」は十一月廿六日久々にて東京劇場に於て華々

しく公演されたが、栗島狭衣氏作竹澤仲造曲の義太夫舞踊「雪の紫雲山」には豊竹巖太夫ツレ竹本松太夫、同土佐子太夫三味線竹澤仲造、ツレ鶴澤市之助、竹澤仲三等が出演した。

湯原清司氏の永眠

本誌名譽會員湯原清司氏は久しく病氣療養中の處、十一月十八日午前二時四十五分遂に不歸の客となられた。氏は醫師の勸告に依り愛好の義太夫も永々休演せられてゐたが、一時は斯界を賑はせ又功績も少なくなかつた。なほ氏は日清製作所を經營し繁忙の中にも、大井濱川の警防副團長として戦時下の國防に勤められ、熱心なる努力を以てその範を示されたものである。

告別式は廿日正午より一時迄大井の自宅に於て営まれたが、各方面よりの花輪も多く盛葬を極めた。謹んで哀悼の意を表す。

太 棹

ニュース

▼名作淨瑠璃同好會 前號既報の通り十二月十三日午後二時より丸の内電氣俱樂部に開催。

▼彌生會 鶴澤彌玉後援の彌玉會は白井清華、坂本あるを、齋藤山生、橋本三司、富岡生昇の五氏に依て組織、十二月申第七回を開催。

▼一葉會 阿部一、菅原葉光、高山和子氏等の一葉會は、十二月七日駒形俱樂部に開催。

▼たから會 醫業の緒方千晴、橋本三司、山中花仙、箕浦其甫、熊谷美福氏等のたから會は近々復活の由。

花 輪 ◆ 東 花 ◆ 籠 花

御送迎・御佛事見・御舞は何卒弊店へ御用命願上候
新花・廉價・迅速は弊店の特色

花

下谷稻荷町(青バス車庫前)

サカタ・フロリスト

電話(下谷)六一八一番

本誌 後援 名譽 會員

(イロハ順)

(東京之部)

廣瀬 いろは氏

吉川 浪補氏

阿部 一氏

菅原 葉光氏

北島 北斗氏

中澤 巴氏

安藤 どころ氏

吉田 登盛氏

小川 都山氏

安藤 都昇氏

保々 長平氏

緒方 千晴氏

栗原 千鶴氏

岸 竹史氏

神馬 里芳氏

岡本 柳光氏

本木 大熊氏

鈴木 和樂氏

小林 和舟氏

林 和勢氏

青山 和狂氏

飛石 かなめ氏

加藤 兜氏

高橋 可遊氏

西田 可松氏

高山 和子氏

大用 大嘉津氏

田口 辰壽氏

疋田 大龍氏

井上 巽氏

小林 太二八氏

根本 團壽氏

野田 高尾氏

杉山 橋氏

坂倉 素遊氏

川口 子太郎氏

小埜 長とろ氏

宮本 武藏氏

萩原 うつぼ氏

中野 乃菊氏

山下 彌生氏

國井 やまと氏

松林 福笑氏

長谷川 文久氏

鈴木 兒雀氏

安藤 光樂氏

水戸部 壽氏

原田 越巴氏

河野 國聲氏

松岡 語松氏

田中 湖月氏

湯淺 光玉氏

岡崎 四六氏

寶藏寺 天昇氏

大築 葵氏

松本 朝章氏

及川 旭氏
 柳 有明氏
 中川 愛氷氏
 奥村 三玉氏
 寺岡 三幸氏
 木村 さかえ氏
 齋藤 山生氏
 平井 榮氏
 細川 清氏
 金田 金鳳氏
 錦 錦松氏
 淺田 奇聲氏
 星野 桔梗氏
 日野 金泉氏
 前島 貴昇氏
 歸山 歸世花氏

猪谷 銀水氏
 岩木 義雀氏
 吉良 蟻若氏
 保坂 有曲氏
 岩田 末成氏
 高瀬 操氏
 吉田 美地旬氏
 横井 三由氏
 野口 みなと氏
 北村 三葵氏
 池田 三國氏
 吉田 三芳氏
 高橋 宮古氏
 鈴木 松寶氏
 小原 松樂氏
 菊池 秋月氏
 平井 壽樂氏

山田 壽瓢氏
 田口 司重氏
 濱口 秋華氏
 武笠 宏亮氏
 高品 一重氏
 平山 平茶氏
 桑原 美峰氏
 佐野 美昇氏
 松岡 茂里雄氏
 白井 清華氏
 近江 清華氏
 塚口 清雀氏
 沼井 盛鶴氏
 時田 静史氏
 (地方之部)
 米國 平野一昇氏
 同武 榮玉氏

同 杉山 陶岳氏
 同 兼廣 廣玉氏
 同 西本 西紫氏
 神戸 岡田 源氏
 大垣 吉岡 十八公氏
 船橋 川奈部 銀司氏
 下關 保良 鈴鳳氏
 横濱 和田 和朝氏
 同 霜島 錦司氏
 八幡 古賀 大彌氏
 名譽會員
 保坂 有曲氏
 青山 和狂氏
 高山 和子氏
 塚口 清雀氏

本誌後援名譽會員を御快諾
 賜り難有奉謝候

木棹社

當座帳

編輯後記

▽寶藏寺天昇氏 今夏末より渡滿中。
 ▽大澤二四喜氏 住居店舗共に改築落成。

▽河野國聲氏 滿鮮地方旅行中の處、十一月十三日歸京。

▽東都五十義會 同會の事務所を今回會長細川清氏方に變更、(本所東兩國二丁目四ノ一 電話本所〇八一八番)

▽豐澤團七 杉並區阿佐ヶ谷五丁目三三番地へ轉居。

▽鶴澤綱之助 世田谷區太子堂町一五三番地へ轉居。

▽豐澤松市郎 本所區菊川町三丁目一六番地岡田方へ轉居。

寄贈新刊

▽大日本淨瑠璃界▼淨曲新報▼淨瑠璃時報▼風▼淨曲研究▼土▼露▼寶塚月報▼みどり▼明るい家▼文學▼京城のラヂオ▼藝▼斯水▼可樂▼松のみどり(豐澤芳太郎氏著)

★納會月に入りまして皆々様お忙しい中にも、各會の盛んな事は同慶の至りに存じます。

★本號は延刊致しまして誠に申譯がありません。實は印刷所が先月から一つの單行本を引受け、二百頁も組んだまゝ校正も終らず、後の原稿も出ずその上定期物の雜誌が十一月號を半分組んで、これが又十二月へまはされた爲め、二百數十頁といふ活字が寝てしまつた騒ぎで、どうにも太棹に手が出ないといふ事になり、方々の印刷所を探して半分だけ臨時に他で組んで貰ひ、苦心慘愴漸く發行の運びに至りました次第、それこれで本號は合本として發行、活字のいろ／＼違ふ處を御覽下され何卒御諒察をお願い申し上げます。(芳河士)

(行發日十回一月毎)

號十・九百第

定	一部金三十錢	郵税三錢
六月分	金一圓八十錢	郵税共
一年分	金三圓	郵税共
價	普通一頁	金貳拾圓
廣告	別一頁	金參拾圓
料特		

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます
 ▼誌代は總て前金御拂込の事
 ▼なる可く振替に御送金の事
 ▼郵券代用は一割増但三錢切手の事

昭和十四年十二月八日印刷納本
 昭和十四年十二月十日發行

東京市小石川區音羽二丁目四
 編輯兼 發行人 富取 壽鹿

東京市牛込區早稻田町五八
 印刷人 栗原 榮松

東京市牛込區早稻田町五八
 印刷所 栗原印刷所

電話牛込二四五二番

東京市小石川區音羽二丁目四

發行所 太棹社

振替東京三一七八五番

近刊 帝都素義名鑑

東都素義界に未だ名鑑のない事を遺憾とします。弊社は皆様の御近影に平素御愛用の語り物を始め、師匠名並に會名其他の略傳を付し、近日「帝都素義名鑑」の刊行を企てました。初め「東都素義名流大鑑」といふ名稱でありましたが、皆様の御意見もあり、今回「帝都素義名鑑」と改める事に致しました。しかし、もつと良い名稱がありましたなら何卒御教示を御願ひ申上ます。

五月頃には刊行の豫定でありましたが、今後こうした名鑑は五年十年の間には編纂不可能と存じますので、此際お一人も多く御賛同を仰ぎ度く、發行を延期致し極力勧誘申上げたいと存じます。

本名鑑は寫真本位として、一頁金拾貳圓（配本共）四六倍版、上質アート、和製チツ入にて装幀の高雅は、皆様の御机上に一層の光彩を添へる事と存じます。

弊社の此の企畫を御援助賜り、何卒御賛同御申込みを偏に御願ひ申上ます。

太 棹 社